

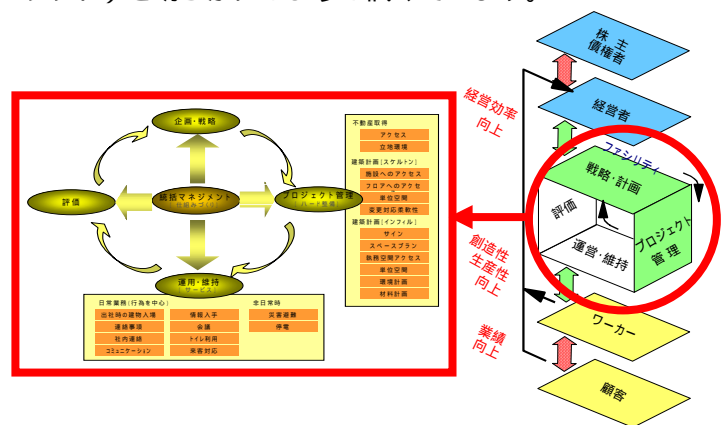
ユニバーサルデザイン研究部会調査報告要約

ユニバーサルデザインという言葉をご存じでしょうか。あまり聞き慣れない言葉かも知れませんが、最近はそのラウムのコマーシャルでも耳にされた方も多いと思います。「ユニバーサル」とは、「普遍的な、万人の」の意、「デザイン」は設計という意味ですから、ユニバーサルデザインは「万人のための設計」といったことになります。ユニバーサルデザイン(以下UDと略す)といっても様々なものがありますが、一般的には、製品(プロダクト)、環境(都市・建築・空間など)、情報(IT)、社会制度などに分けられますが、私たちの研究部会で扱うのは、「環境のUD」のうちの、ワークプレイス(オフィス)についてです。

これまで、製品にしろ環境にしろ、そのユーザビリティ(使いやすさ)の水準は、「ミスター・アベレージ(平均的な身体能力を持つユーザー)」を想定してつくられてきました。したがって、身体能力の低いユーザーにとっては使いにくいことが多くあります。身体能力が低いと言えば、障害者や高齢者と限定しがちですが、例えば、視力が低い、左利き、妊娠中、背が低い(あるいは高すぎ)、怪我や病気をしている、母国語が違うなど、様々なケースがあります。UDは、そのユーザビリティの水準を身体能力を低い人を含む「より多くのユーザー」まで拡大して考えておくことにより、全ての(ほとんどの)ユーザーに使いやすくしておこうという考えです。バリアフリーという概念が、障害者や高齢者のための配慮という視点であったのに対し、UDは計画・デザインの段階でユーザビリティをより良くすることにより、より多くのユーザーが楽に使えるようになることを目的としています。

さて、オフィスに関しては、社会の高齢化、雇用機会均等、グローバル化が進むにつれ、既に一部の企業に見られるように、より多様なワーカーの雇用が進む可能性があります。また近年、将来の社会状況の変化の中で、ワークプレイス、特にオフィスのUD導入を後押しする社会の流れが見られます。社会責任投資(SRI)の台頭、年金ファンドの政治力、ファシリティの社会インフラ化、企業の社会的責任重視、ハートビル法の改正、障害者雇用率公表の動きなどです。こうした状況の中、ユニバーサルデザイン研究部会では、ワークプレイスにおけるUDの価値(メリットとデメリット)を明らかにしようと試みています。

さらに、UDの導入に当たっての具体的な留意事項についてFM基本業務サイクルに沿い、「企画・戦略」「プロジェクト」「運用(オペレーション)」「評価」の各フェーズで検討を行っています。これらの検討結果は、近日中に「オフィスマネジメントのためのユニバーサルデザイン・ガイドブック」として発刊する予定となっています。



私たちは、UDが今後ワークプレイスに導入され、高齢者・障害者を含む多様なワーカーが、高い質の職業人生(QOwl)を送ることを望んでいます。しかし、調査研究の目的はUDの推進そのものではなく、ワークプレイスにおけるUDの価値を明らかにし、導入のための道具立てを用意することにあります。あくまで主人公は、ワークプレイスを所有する経営者であり、ワークプレイスを使うワーカーです。この調査研究が、UD導入の「触媒」の役割を果たすことができれば、と考えています。